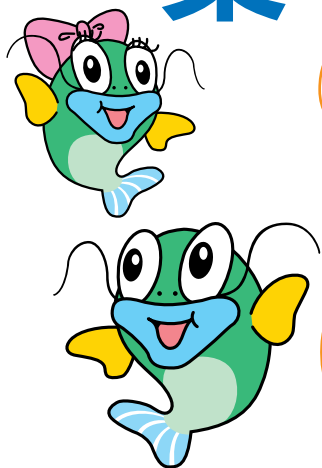


水

のルポ

琵琶湖・淀川は滋賀県や京阪神地区のたくさんの人々に飲み水を送り、田畑や工場に欠かせない水源としても、なくてはならない役割を果たしています。今回のルポは流域の方たちの「水」への思いを、お聞きしました。

水が支える暮らしと産業



米は水の贈り物です

野洲平野は滋賀県で最も大きな平野で、土地も肥え、近江米の主産地として有名です。一方で、野洲川は暴れ川ともいわれ、昔は大水のため何度も堤防が決壊しました。また水不足の時もあり、地域によって、かつてはさまざまな工夫が行われてきました。川から取った水を田に入れ、また川に流し、その水を再び田に入れてムダなく循環させたり、山手では溜池をつくりました。

中主町では琵琶湖の水をクリークから水車で田に揚げる方法などで米づくりを支えてきました。人力で回す水車は重労働で、特に夏は大変でした。それでも以前は干ばつになると雨を待つしかないという時もありましたが、昭和35年からの土地改良事業でそれぞれの田にポンプで水が行き渡るようになって、水の苦労は少なくなっています。平成6年の渇水でも、大きな被害はなく、米どころの水源地は守られました。今後も近江米はニホンバレ、キヌヒカリなど特徴のある品種を中心に発展を続けたいと思います。

農地は山林と同じように大きな保水の役割を果たしています。米は水の贈り物ですし、工業など他の産業が発展したのも農地が地域の水を大切に貯めてきたおかげだと思っています。水を大切にすることを次の世代にも伝えていきたいですね。



龍骨子(りゅうこし)。昔の田に水を送る道具。



ポンプのない時代に使われた水車。

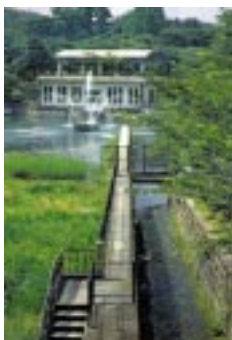


中主町長
(野洲川下流土地改良区 理事長)
田中政之さん

京都の発展は琵琶湖疏水から

琵琶湖疏水は、明治の東京遷都で人口が30万人から20万人に減ってしまった京都の活気を取り戻すため、当時の北垣国通知事が建設しました。工場や灌漑の用水、船の水路など多目的に役立てようと、知事は弱冠21歳の田邊朗郎氏を土木技師に採用するなど、思い切った計画を進めました。はじめは60万円だった予算も、国と話し合っていくうちに125万円に増加。当時の内務省の国家予算がおよそ100万円でしたから、まさに国家的な大事業だったわけです。技術的にも最先端で、アメリカで発明されたばかりの水力発電を導入して日本初の水力発電を行いました。その電気で市電が走るようになったんです。

琵琶湖疏水が完成した明治23年から100年以上が経ちましたが、今でも疏水は京都市民の大切な水源です。疏水がなければ、京都は現在のような人口146万人の大きな街にまで発展しなかったでしょう。疏水のまわりの水と緑の風景も、親しまれていますし、京都の人々にとってかけがえのないものになっていると思います。街の発展とともに水の需要も増えたので、明治45年に第二疏水がつくれ、また、たくさんの浄水場も建設され、今では全体で1日105万 m^3 の供給能力があります。そのため京都では深刻な渇水被害はこれまでありませんでしたが、水の大切さはこれからも多くの人々に訴えていかなければいけないと思います。



琵琶湖疎水(手前)

琵琶湖疏水記念館
琵琶湖疏水竣工から100周年を迎えた平成元年に開設。疏水工事のようすや京都と水の関わりがわかる多彩な模型や図版、ビデオが展示されています。



琵琶湖疏水記念館館長
深田辰男さん

